ちた未来塾 第４回　平成 28 年 11 月４日 18 時～20 時半　会場：わ～くわくラボ

会場の解説（知多市企画情報課の小屋敷氏より説明）

わ～くわくラボは元寿司店舗で 15 年間閉鎖されていたが､大家のご厚意で今年と契約、「わ～くわくラボ 人財・志事ツクール事業」として人が集い、出会う中で生まれる新しいチャレンジを生む拠点として発足し、生まれ変わる。何か始めたい人にエールを送り、生まれた活動の伴走支援を行う。

ゲストスピーカー　久保 匠さん（ＮＰＯ法人ゆめじろう）

（1）自己紹介

北海道旭川出身、昨年日福大を卒業した後、武豊で障害者支援に従事する。在学中に准ファンドレーザー（※1）を取得し日本ファンドレーザー協会　東海チャプターに所属している。関心事はまちづくりで経営を成立させること。

※1）ファンドレイザーとは、「社会のために何か役に立ちたい」と思っている人たちと「社会の課題を解決している人たち＝NPO」をつなぐ人。直接、課題の解決に向けた活動はできなくても、自分にかわって確実に自分の思いや考えを実行してくれる人たちに託すお金が寄付や会費といった形で提供され、その善意に応えるように資金が使われているかを確認するのもファンドレイザーの役目。

（2）学生時代

祖母の病気をきっかけに人の役に立ちたいという思いから、介護福祉士（※2）を目指して日福大へ入学したが、この学部では資格取得できないと知り挫折した。大学２年のある日、カレーのにおいに釣られて地元の自主防災組織で１年間活動、NPO 法人レスキューストックヤード主催のボランティアバスに参加したことがきっかけで災害支援に没頭する。

※2）介護福祉士とは、日常生活が困難な高齢者や身体、精神に障害のある人などに対して、食事や入浴、排泄などの身体介護を行うほか、家事援助、相談・助言、社会活支援など大きく分けて４つの業務を行う。1987 年の社会福祉士及び介護福祉士法に基づく国家資格。

（3）災害ボランティアからの学び

復興支援とは泥掻きやがれき撤去だけではなく、被災者の心に寄り添った支援も必要だと仮設住宅で暮らす人から教えてもらった。それ以降、岩手・宮城・福島、長野県南木・白馬、兵庫県丹波へ災害ボランティア活動を行った。ボランティアセンター

が閉所され、報道がなくなった南木曽へ再訪問した。復興が進んでいないにもかかわらず相談機関が閉鎖された現状を目の当たりにしてボランティアに対する不信感を募らせた。

(4)制度の隙間を支援するということ

行政ではカバーしきれない「制度の隙間」を支援するNPOの存在を知り、NPOインターンシップで経験を重ねる、本当に助けてほしい人は自分から声を発しないこと知る。今ある課題に対して制度は後追いであり、その支援に関する他機関からの公認には時間がかかる。自分がやる覚悟と多くの人の協力が必要だと思うが、今の社会にはその応援の部分が欠けている。だから中間支援活動で社会貢献したいと考える。

(5)これから一歩踏み出す塾生の皆さんへ

自分の直観や感性を大切に、それがマイナスからのスタートでも良し、突き進むべし。

ゲストスピーカー　竹内　綾さん（ちたビジョンプロジェクト）

(1)活動することと大事にしたいこと

現在は、朝倉に住む外国にルールを持つ子どもの学習支援を行っている。具体的には、小学生と一緒に学校の宿題をやる、といった活動。見た目だけでなく、内面的に自分は何者であり、何をなすべきか、というアイデンティティが揺れている子どもも含めて広く支援している。

（2）自分のこと

幼少期「私はここに居ていいのかな？」という疎外感があり、学校になじめなかった。大学時代は、日本がレバノンのインフラ整備支援の現場を訪問した。見学する予定の建物が攻撃によって破壊されていたことを目の当たりにして、物事は現場を見ないと何も始まらないと思った。

自分のやりたいことは何でも実現させてくれる理解のある両親は教員。だが、戦火に巻き込まれる危険性があるパレスチナへの渡航に対して、今思えば親として猛反対する父を理解できるものの、その当時は「物事の起こりは仕方がない」という父に対して「しょうがないでは何も解決しない」という反発心を抱いた。

（3）NPOは素晴らしい？

「自分の気になることを大事にする」ことは大事だと思うが、きれいごと並べるNPOは胡散臭いのではないかと不信感を抱いている。名古屋にあるNPOであたらいていた時、「今ある平和を守るため、2度と戦争を繰り返さないためにも過去から学び、未来へ引継ぐべき」を聞いて、若者は負を背負い続けるのか？今の社会は本当に平和と言

えるのか？！と憤った。

（4）多文化と多様性

カナダで留学中、白人社会の中でアジア圏の自分は異質な存在だった。次の留学先はイギリス。NPO で働きながら暮らした地域は、移民が 8 割を占められ「違い」があることが当たり前だから、とても楽だった。そのコミュニティでは、利害関係のある異なる国の人、仲が悪い人同士の共生支援の活動をしていた。そこで学んだことは、きれいごとではなくて、解決するためには、そこに住む当事者同士が対話することが大切だという事。

(5)やりたいこと　必要なこと

イギリスから帰国して真っ先に在住帰国人が多い朝倉団地に居を構え、コミュニティセンターで茶菓子を準備して語り集う場を設置したが、誰も来なかった。そこに、ニーズはなかった！ヒアリングを行った結果、学習支援が求められていた。（資料、エスペランサの学習支援実績を参照）。活動を通じて、いろんな人との関係が出来てきたが、ニーズに合う仕事を見つけるのは難しいと実感している。

(6)おすすめの方法

自分から働きかけることが一番の近道。市民活動センターや同じような活動団体、自分の住んでいる自治会の人と会い、直接伺うことが大切。とても親切に教えてくれる。「いいね！」という人もたくさんいる。でも、同じ土台に立って対話する人は少ない。だから、とことん対話することが大切。やり方の違いでけんか別れもしたけど、仲間は増え、今の活動メンバー（仲間）がいる。

(7)おさらい

〇まず自分の心を聞いてみよう
〇やりたいことと必要なこと！両方ともがとっても大事
〇自分の周りを見てみよう！タネはたくさん落ちている
〇誰でも一人ではできません！仲間を集めよう
〇迷いながらでいいんです！手探りで進んでいこう

ふりかえりとまとめ

人にやさしいまちづくり×ゲストのキーワード

★都市計画分野では、ユニバーサルデザイン・バリアフリー

CBID（inclusive development　※3）

多文化共生（social inclusion 包摂⇔exclusion 除外）

＜市民運動＞多様性（みんな違っていい、個性・それぞれの役割・居場所）

→＜制度＞になった途端、画一性・公平性・平等性が求められ、必ず狭間が生じる

広狭のマネジメントが肝心（ヒト・コト・カネ）

※3（地域に根差したインクルーシブ開発）コミュニティや社会が障害のある人をはじめとする、すべての脆弱な人々やグループを含めてインクルーシブなものに変わることを意味している。「ジェンダー、障害、少数民族、難民状態の人、セクシャルマイノリティその他、誰も開発から取り残されてはならない。インクルーシブ開発では、異なる関係当事者間でのパートナーシップや連携が必要である。特に CBR,障害者団体、家族、政府間の連携は大事である。」（マヤ・トーマス 2010）

★アクションを支える伴走型支援の必要性

- 自ら動くことで切り拓かれる
- つながっていくと、連鎖的に面白い展開
- 一人で円陣は組めない
- 共感力を育むこと

★相互性の大切：ピア（仲間）として、やる気を引き出す

支援（意識も含めて）とは、一方的な働きかけ？

★「これから」は「これまで」の延長上にあるか？

Forecasting（予報）⇔Backcasting（未来予測）

これからの担い手は“若者”だから「これから」の発想は“挑戦”　対話力が必要！

★やりたいコトができるようになるために努力する。

できるコトにニーズが合致すると

やりたいコトの幅が広がり

事業として継続する。そして未来（社会）は変わる。